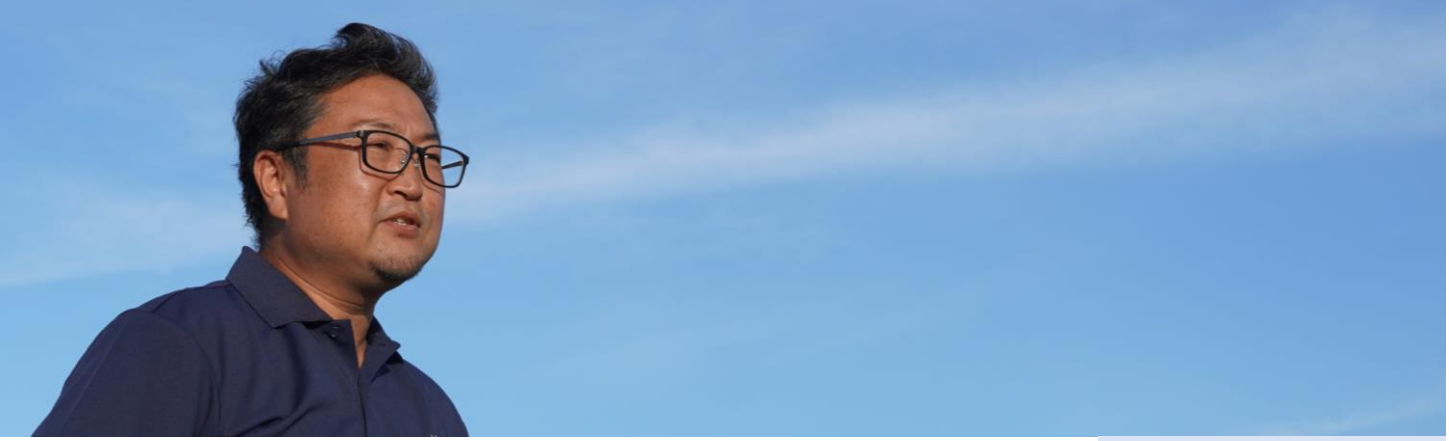
この手に受けた、ゆうきのバトン

Midrist Vol.10

ＪＡ新潟かがやき・高山和彦さん（新潟県阿賀野市）



「ゆうきの里ささかみ」をご存知だろうか。

平成2年に「ゆうきの里」を宣言し、地域の行政とJAが一体となって有機農業の推進に取り組んできた新潟県の笹神村（現在の阿賀野市）のことだ。さらに令和7年には阿賀野市が「オーガニックビレッジ」（※）を宣言しているが、阿賀野市笹神地区には、環境に配慮した農業が30年以上前から地域に根づいているのだ。

ここでは、水稲作付面積1500ヘクタールのうち、約7割が有機栽培や化学肥料・化学合成農薬を7割または5割減らして作られる特別栽培米となっている。

※生産から流通・消費まで一貫して、地域ぐるみで有機農業に取り組む自治体

そんな「ゆうきの里ささかみ」で営農指導員として活躍しているのが、JA新潟かがやきの高山和彦さんだ。

高山さんは、平成20年に合併前の旧JAささかみに就職。新潟市生まれで、専門学校を卒業した後は介護士として働いていたが、結婚を機に阿賀野市へ移住した。ちょうど転職を考えていた時、JAささかみの職員募集のチラシが目にとまり応募したという。「農業の勉強をしながら働けるなんて一石二鳥では？」と、当時を振り返る。

だが、実際に飛び込んだ農業の世界はイメージと真逆だった。「慣行栽培はもちろん、特別栽培、有機栽培…覚えることがあまりにも多かった」と高山さんは明かしてくれた。それに加えて、生産者との会話では方言が飛び交い、最初は言われたことの半分も理解できなかった。それでも地域の暮らしや課題に寄り添い、地道に汗をかくことで生産者と信頼関係を築き、着実に営農　指導員として成長していった。

この地域が環境保全型農業に舵を切った背景には、パルシステム（当時の首都圏生活協同組合事業連絡会議）との出会いがある。昭和の時代、全国的に減反政策が進められていた中で、笹神村は「全国で一番減反をしない村」として注目を集めた。そこに興味を持って訪れたのが米の仕入れ先を探していたパルシステムだった。当時は食糧管理法の下、米を自由に取引することはできなかったが、昭和57年に餅の販売を始めたことで取引の第一歩を踏み出した。昭和59年には正月用のしめ飾りの販売を開始し、この取引は今でも脈々と続いている。また、「米の取引ができないのなら」と始まったのが生産者と消費者の交流活動だ。今では「産地へ行こう。」ツアーとなり、40年以上の歴史となっている。消費者が産地を訪れ、農家と直接触れ合うこの取組は、信頼と共感に基づく関係づくりとして定着し、今なお、ささかみの有機農業の基盤を支えている。

その後、食糧管理法の下でも生産者から消費者へ米の直接販売を可能にする特別栽培米の取引が開始された。「高く売れて栽培しやすい米を望む農業者と、安くて美味しい米が欲しい消費者。両者の希望をうまく調整したのが特別栽培米だったそうです」と高山さんは説明する。だが当時、有機や環境保全といった考え方はまだ理解されにくく、むしろ異端扱いされることも少なくなかった。

「ようやく国の方向性もそうなってきているし、笹神の人たちは先見の明があった」と、先輩方の決断を誇らしそうに語っていた。「どの生産者のお米を、どの消費者が食べているか、私たちはお互いが見える関係なんです。JAにお米を出しているのに、それを買っている人の顔が見えるっていうのは、珍しいでしょう？直接『美味しい』って言ってもらえることが、生産者にとって一番の励みになります」と、胸を張る。

現在、阿賀野市では、地域全体で有機農業の産地づくりを目指す「オーガニックビレッジ事業」に取り組んでいる。今年1月には、有機農業の推進と地産地消の促進を目的に、市内の小・中学校全11校で、約1か月間にわたり有機栽培米を使用した学校給食を提供した。阿賀野市役所農林課の古田島さんは、「今後は米に限らず、さまざまな有機農産物を学校給食に取り入れていきたい。これにより、有機農業が農業経営の新たな選択肢となるよう、環境を整えていきたい」と展望を語る。また、「現在、有機農業を実践している生産者の多くは笹神地区に集中しています。市全体で取組を広げていくうえで、高山さんのような相談できる存在がいることは非常に心強いし、そういったことをもっと生産者の皆さんにも知ってもらいたい」と信頼を寄せる。

取材の最後に、高山さん自身が管理する有機栽培のほ場を案内してもらった。営農指導という立場なら、「自分でやってみなければ本当の意味で伝えられない」との思いで農業を始めたという。ほ場には色づき始めたコシヒカリと、まだ青々とした新之助が並んでいた。有機栽培の水田では、慣行栽培のように雑草を完璧に抑えるのは難しい。それでも「今年の除草は上出来」と笑顔を見せる。かつては人力で引っ張っていたチェーン除草機を、釣りで使うリールを応用して電動で引けるように改良。高山さんは、「この画期的な除草方法は私の大先輩が考えたものなんです。辛い、嫌な除草作業も、この除草機のおかげで大幅に省力化されました。ぜひ皆さんもこの除草機を活用してほしいと思います」と教えてくれた。

また「ささかみで有機栽培や特別栽培がここまで広がったのも、すべてその先輩方の努力のおかげ。僕なんて何もしていません。有機、環境保全型農業に取組むと、当時の時代背景の中で判断してくれたことに感謝しています」と思いを滲ませる。

感謝の思いとともに、田んぼを見つめる その背中には、覚悟がにじんでいる。「この取組を続けて、次の世代にバトンを渡すのが自分の役割なんだと思っています。形ややり方は変わっていくかもしれないけれど、考え方は変えずに伝えていきたい」

ゆうきの里ささかみで育まれた志は、高山さんの手によって未来へと受け継がれようとしている。

Writer: 稲垣

DATA【JA新潟かがやき（ささかみアグリセンター）**】**

住所：新潟県阿賀野市山崎58番地

連絡先：0250-25-7252

水稲栽培区分別面積

有機栽培（転換期間中を含む）：26ha

特別栽培（7割減）：496ha

特別栽培（5割減）：484ha

慣行栽培：502ha